

湖辺ルネッサンス～大津のヨシ作戦～ Lake shore Renaissance of Otsu

大 西 政 章 *

Masaaki ONISI *

ABSTRACT : Otsu city locates between Lake Biwa and mountains. We have 24 km long beautiful shore and reed fields here and there. But recently they are having been destroyed by urbanization.

Nowadays , reed fields remain only 18.5 ha in the western part of the lake , but they are well grown , so that we enjoy their natural beauty.

Reed campaign , we name it " Lake shore Renaissance " , is planned to keep the water quality of the lake , to respect the lives , and to promote the civic movement and consciousness as symbolic event. It is carried out by citizen , enterprise and administration.

This campaign has spread in the whole city , and has become the big event in spring.

KEYWORDS : LAKE-SHORE , REED , LAKE BIWA , OTSU CITY

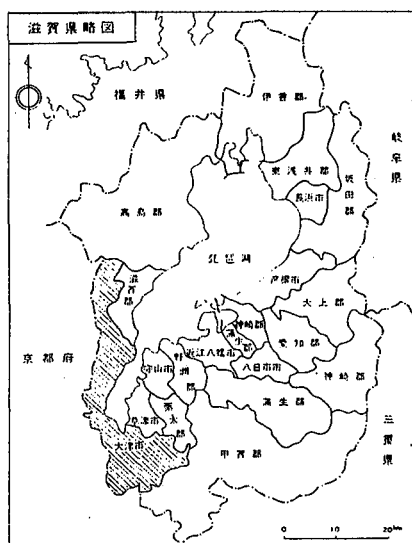
1 はじめに

大津市は日本のほぼ中央に位置する滋賀県の西南部にある。

東側は琵琶湖に面しており、延長24 kmにも及ぶ湖岸線有している(図1)。これらの湖辺は、近年の都市化の進展により自然の姿が失われつつあるが、西岸を中心に18.5 haのヨシ帯が残り、琵琶湖の原風景が美しく保たれている。

そこで、大津市では、水質浄化や生物を豊かに育むなど様々な機能を持つこれらヨシ帯を保全するとともに、ヨシを通じて琵琶湖と私たちの生活との関わりを見直してもらおうと、市民参加による「ヨシ保全活動」に取り組んだ。

標題はこの活動のキャッチフレーズである。



(図1) 大津市の位置

2 ヨシの効用と問題点

ヨシが群生してヨシ帯になると、次のような多様な機能を持つといわれている。

- ① 湖辺生態系の保全 — 付着生物や水生昆虫、エビ、貝、魚など、いろいろな生物が生息する場所を提供する。
- ② 魚介類の生息場所の提供 — 産卵場所、稚魚の隠れ場、餌場、育成場所を提供する。
- ③ 野鳥の生息場所の提供 — 産卵場、餌場、ねぐらを提供する。
- ④ 水質保全効果 — 汚濁物質の沈殿や付着する微生物による分解、栄養分の吸収などによる。

* 大津市民部住みよい環境課 Otsu City , Environmental Conservation Section

- ⑤ 湖岸侵食防止 — 岸に当たる波を弱めたり、地下茎の発達で波が土地を侵食するのを防ぐ。
- ⑥ 湖辺の景観保全 — 近江八景にも描かれた湖辺の代表的な景観を生み出す。
- ⑦ ヨシ製品の材料の提供 — ヨシズなどの生活用具の材料になる。

一方、ヨシ帯に陸や琵琶湖からのゴミが集まったり、枯れヨシが波や風でちぎれて湖岸に打ち上げられ見苦しいなどの問題がある。

3 ヨシ作戦に至るまで

本格的なヨシ保全活動に取り組むまでには、ヨシの植生や環境保全に果たす役割についての調査を重ねる一方、ヨシに対する関心を高め、ヨシを通して琵琶湖の環境について考えようと、次の事業を行ってきた。

昭和61年 6月 「湖辺等におけるヨシ帯及び散在性ゴミの実態調査」

昭和62年 7月 「泣いている湖辺、笑っている湖辺」パネル展

昭和62年 7月 「望ましい湖辺環境について」アンケート調査

平成2年 5月 「ヨシ植生状況調査」「ヨシ刈り取り効果の研究」

平成2年 8月 ヨシで造った舟で琵琶湖から瀬田川を下り、開催中の「国際花と緑の博覧会」に参加
これらの活動が、平成3年2月からの市民参加の「ヨシ保全活動」に発展する。

4 「ヨシ刈り」から「ヨシ焼き」、そして「ヨシたいまつ点火」へ

ヨシは、枯れる冬季に刈り取り、焼くことによって春先の発芽が促進され、良いヨシ帯になるといわれている。しかしそのためには、ヨシ刈り、ヨシ焼き、湖辺の清掃など大変な労力が必要となる。昔は周辺の住民の手によって刈り取られ、保全されてきたものであるが、近年、これらのヨシが利用されなくなったため、自然のままに放置された状態になっていた。

このため、大津市では大きなヨシ帯を有する雄琴、下阪本地域の住民や事業所と熱心に話し合いを進め、この2地域で「ヨシ刈り」と「ヨシ焼き」を実施することになった。この話し合いの中から、刈り取ったヨシをただ燃やすだけではなく、大きな束にして「たいまつ」とし、湖辺に並べて地域の祭りとして一斉に点火することが提案されたのである。

琵琶湖では、毎年3月の第2土曜日に、観光シーズンの幕開けとして「びわ湖開き」という行事を行うが、初めての「ヨシたいまつ点火」は、その前夜、平成3年3月15日の夜7時に実施された。

花火を合図に、雄琴と下阪本地域で点火されたたいまつ140本の炎があかあかと湖面を照らした。

5 2地域から全市の活動へ

平成3年に2地域で灯った「ヨシたいまつ」の炎は、平成4年には真野、堅田、膳所地域に、さらに平成

(表1) 「ヨシ保全活動」の経過

年	3	4	5	6	7
ヨシ刈り 地域数 (地域)	2	5	7	7	7
面積 (m ²)	8,100	29,000	29,800	29,800	31,400
参加人数 (人)	260	890	1,310	1,310	1,900
ヨシ焼き 面積 (m ²)	22,000	42,000	9,000	10,000	15,000
ヨシたい 箇所数 (地域)	2	7	9	9	9
まつ 本数 (本)	140	400	520	545	561
参加人数 (人)	400	1,500	2,200	1,600	1,700

5年には晴嵐、瀬田南地域にも広がり、現在7地域9地点と、市域の湖辺一帯で「ヨシたいまつ点火」が行われている(表1)。

参加地域の増加にあわせて、管理するヨシ帯面積や参加人数も多くなり、今や「ヨシ刈り」や「ヨシたいまつ」が春を呼ぶ風物詩として定着し、琵琶湖を守る大きな市民運動に発展してきた。

6 具体的な活動内容

ヨシが枯れて刈り取りが可能となる12月下旬に地域実行委員会が開催される。そこで事業計画が立案され、翌年1月から3月にかけて活動が行われる(図2)。

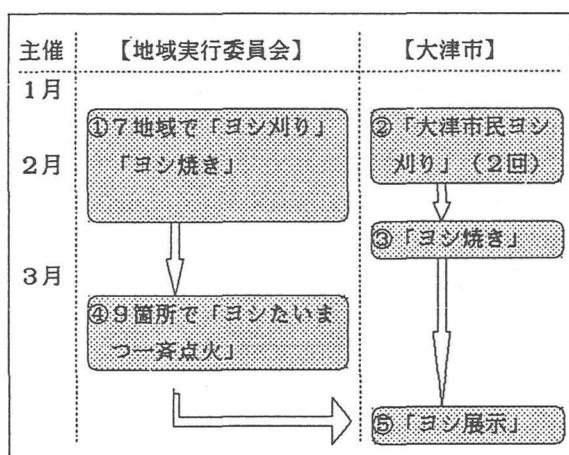
- ① 1月中旬から2月中旬にかけて、各地域実行委員会主催で「ヨシ刈り」「ヨシ焼き」が行われる(図3)。

実行委員会は地域の自治連合会や老人クラブ、PTA、子供会、婦人会などが中心となり組織される。

- ② 同時期に、住民、事業所等、だれでもが参加できる「大津市民ヨシ刈り」を行う。

近年、労働団体を含む事業所やロータリークラブなどの市民団体の参加が大変多くなっている。

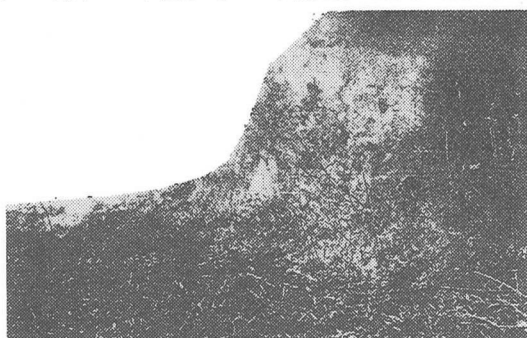
- ③ 大津市消防本部や消防分団の協力を得て、最も広い『雄琴のヨシ原』で「ヨシ焼き」を行う(図4)。



(図2) ヨシ保全活動の流れ



(図3) 「ヨシ刈り」



(図4) 「ヨシ焼き」

- ④ 「ヨシ保全活動」のフィナーレとして、5~6m間隔で延べ3.1kmの湖辺に「ヨシたいまつ」を並べ、午後7時に花火を合図に一斉に点火する。湖面にあかあかとした炎が映え、幻想的な雰囲気となる(図5)。

各地域では夕方6時頃から多くの市民が集い、点火にあわせて和太鼓や笛の演奏、汁ものの炊き出しを行うなど、春を呼ぶ地域の祭りとして定着してきている。

- ⑤ このような活動の写真やパネルを展示して広く



(図5) 「ヨシたいまつ点火」

市民にヨシの大切さや市民活動をPRしている。

また、画家やデザイナー、ヨシズ業者などの協力により、ヨシを素材にした作品を展示したり、ヨシ帯での環境学習活動の紹介や“ヨシ笛コンサート”も開催している。

7 その他の「ヨシ保全活動」

このような市民による「ヨシ保全活動」の展開をきっかけにして、文化、芸術、産業、教育などの分野に関心が広がり、ヨシを題材とした多様な活動が行なわれてきた。このような活動による人のネットワークが大きく育ってきており、様々な方面からヨシに新たな生命が注がれているといえる（図6）。

- (1) ヨシの活用の一つとして和紙を抄く方法によりヨシ紙を試作したところ評判が良く、画家やデザイナー、市民団体の協力を得ながら、これに江戸時代から大津に伝わる民俗画である“大津絵”や水墨画を描いたり、型染めや版画を行うなど、興味と関心が広がっている。
- (2) 各種イベントや公民館活動などで“ヨシ笛づくり”や“ヨシ紙抄き”を行っている。
- (3) 学校教育の一環として、ヨシ帯に住む生き物調査やヨシ植生調査を行っている。ヨシ紙による手抄きの卒業証書づくりも行っている。
- (4) 多くの個人やグループと協力関係を保ちながら、ヨシや琵琶湖の環境保全のPRを行っている。
- (5) 「ヨシ刈り」等の効果を調べるため、平成2年度からヨシ植生調査を行っている。



（図6） ヨシの活用

8 積極的な市民参加が得られている理由

市民参加による「ヨシ保全活動」はこの5年間で参加規模、内容ともに大きく広がった。この理由として次のことが考えられる。

- (1) 私たちの生活や産業と琵琶湖との関わりは非常に長い歴史があり、琵琶湖から計り知れない恩恵を受けている。中でも、古くからヨシ帯を中心とした自然豊かな湖辺で、水遊びや魚取り、ヨシを利用するなど多様な関わりがあった。
このような琵琶湖が危機に瀕しており、地域と琵琶湖の接点である湖辺のヨシを守ることを通じて新しい琵琶湖との関わりを始めようという呼びかけに、多くの住民、団体、事業所の賛同を得たと考えられる。
- (2) 市民が主体となった体験型の自由な環境保全活動として呼びかけを行い、関心に合わせて思い思いのスタイルで参加してきている。
- (3) 地域の創意を生かし、子どもから高齢者まで参加したまちづくり運動として継続してきている。
- (4) 近年、労働団体を含めて事業所の地域の環境保全に対する関心が高まりつつあり、住みよい環境づくりに積極的に関わっていこうとしている。「環境にやさしい活動」が企業のイメージアップにつながる時代であり、自主的、組織的な参加が非常に多い。
- (5) 大津市が、地域の「ヨシ保全活動」に対する経費の補助や、ヨシPRイベントの開催、多くの住民、団体など協力者のネットワークづくりを進めるなど、活動を積極的に支援している。
- (6) このような大津市の「ヨシ保全活動」を一つのきっかけとして、琵琶湖の環境保全には湖辺の生態系の保全が重要であるとの認識が広がり、平成4年3月25日に滋賀県が“滋賀県琵琶湖のヨシ群落の保全に関する条例”を制定し、同年7月1日に施行した。これは、市民のヨシ保全活動を大いに支援する

ものとなった。

9 活動の成果

- (1) 滋賀県が「ヨシ条例」に基づき湖辺全域のヨシ群落の維持管理事業を行っているが、大津市地先においては、この活動がその役割を果たしている。
- (2) 大津市の代表的な市民主導の環境保全活動となり、広く市民に湖辺だけでなく琵琶湖の環境全体に関心を寄せていただくために大きな役割を果たしている。
- (3) 活動を行っている地域の湖辺のゴミが減り、効果を上げている。
- (4) ヨシをテーマにして多くの住民、団体、学校などがネットワークをつくり、交流が広がっている。

10 今後の課題

- (1) ヨシ帯を始めとした湖辺植生の管理手法についてはまだまだ未解明の部分が多いことから、並行して行っている「ヨシ植生調査」結果や他の機関の調査・研究結果をみながら、より望ましい方法について検討していく必要がある。
- (2) 湖辺への接近が困難な地域や水ヨシ部分が多くて刈り取り作業が難しいところも多い。このような市民の活動が困難な地域に対する対策の検討が必要である。
- (3) 現在、市民参加によるヨシ保全活動を行っているのは大津市だけである。このような活動が湖辺地域以外の市民や他地域に広がっていくことが期待される。
- (4) 事業の継続のために多額の経費が必要であり、滋賀県の積極的な支援が望まれる。

11 おわりに

大津市総合計画基本計画では、21世紀の大津が目標とする都市像の一つに「水辺交歓都市」を掲げている。これを実現するために、大津湖岸なぎさ公園や湖岸緑地などの親水性豊かななぎさを創出することとあわせて、ヨシ帯の保護、育成によって琵琶湖の原風景を守ることを具体的施策の一つとしている。

大津市の湖辺を彩る「ヨシたいまつ」の炎は、このような琵琶湖を守る大津市民の心の表現である。この活動がさらに大きな輪となって琵琶湖をつつみこんだとき、私たちが目指している生き物が豊かに生息する美しい琵琶湖の実現に一層近づいていることだろう。